

2024.11.3南板橋教会 主日礼拝／聖餐礼拝 『放蕩息子の人生』 (ルカ伝15:11-24)
2024年11月3日 主日礼拝／聖餐礼拝 降誕前 第8主日

説教題：「放蕩息子の人生」

聖書箇所：ルカによる福音書15章11 - 24節 (139頁)

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 14 交読詩編：詩編97編7 - 12節 (107頁)

讚美歌：83/11 (感謝にみちて) /451 (くすしきみ恵み) /78 (わが主よ、ここに集い) /27

「今週の聖句」〔言「この息子は、」宴会を始めた。〕 (ルカ伝15:24)

「牧師室の窓」 「語り継ぐ原爆無き世被爆者の思いを助くノーベル平和賞」

「霜月の枯葉を踏みて鎌倉の恩師墓前に花を手向ける」

(1)皆様、おはようございます。本日は教会暦では「降誕前第8主日」です。降誕前が5週間経過しますと、今年は12月1日が「待降節(アドベント)」第1主日になります。その待降節第4主日の後に主のお誕生、クリスマスを迎えます。私の家の近くに花屋さんがあり、毎週日曜日教会へ行く朝の7時半過ぎにその前を通過して駅に行きます。お店のご夫婦が開店前の準備をしており、私は挨拶をして花々を見ていきます。先週の日曜日からポインセチアの花が並び始めました。鮮やかな赤はクリスマスが近いことを伝えていきます。5・6年前に詠んだ短歌ですが、「この時期は花屋の花は輝くと店主語れるクリスマスの頃」と詠んで月刊誌「信徒の友」文芸欄に送りましたところ、特選に入選しました。店主ご夫妻にお話しし、大層喜んでくれました。この時期に皆様も花屋さんの花が輝いているのをご覧になられては如何でしょうか。

(2)先週からルカによる福音書の講解説教は第15章に入りました。前回申し上げました様にルカ福音書全部で24章ある中で、中心となる箇所です。イエス・キリストが人々に最も伝えたい内容が書かれています。15章には3つの譬え話が書かれています。その内の「見失った羊を探し出す」譬え話と「無くした銀貨を見つけ出す」譬え話については前回お話しいたしました。そして、本日は3つ目の譬え話である「放蕩息子」が書かれています。「遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くし」た放蕩息子が心を入れ替えて(つまり、回心して)親のもとに帰ってきたのです。24節には〔(15:24)この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった〕と書かれています。この「放蕩息子」とは、神の愛情を振り切って彷徨(さまよ)い歩いている私たち自身と言えましょう。その私たちが神のもとへ帰ることが許されるのです。そして、神は私たちが暖かく迎え、受け入れて下さることを、この譬え話によって私たちは疑似体験することができるのです。

(3)では、本日の聖書箇所11節12節を見てみましょう。〔(15:11)また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。/(15:12)弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。〕登場人物が設定されています。父親と息子が二人です。次男が財産分与、それも、生前の財産分与を申し出て、父親はそれを承諾して財産の半分を次男に渡してしまうのです。この父親の職業は23節に「肥えた子牛」と言う文字と、25節には「畑」と書かれていることから農業と牧畜業を営んでいたと思われます。17節には「大勢の雇人」と記されていますので、裕福な事業主であったと推測されます。

併し、財産と言っても、殆どが農地や家畜(つまり、羊や牛)と推測されます。13節には「(15:13)何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。」と書かれています。この次男は、生活の手段をすべて「金に換えて」しまったのです。生活の手段だけではありません、働く意欲を失っていたのです。もともと、働く意欲などさらさら持っていなかったのでしょうか。落語の話ですが、江戸時代

に長屋に住む大工が、仕事で使う大工道具一式を借金をするために質屋に入れてしまったと言う話に似ています。

現代で言えば、そうですね、中学や高校で習う英語や計算の学習を蔑(ないがし)ろにしてしまったのです。生きるための道具や知識を生かすことなく、無駄にしてしまうことと言っても良いでしょう。これからの時代を生きる子どもたちにとって、英語は学問ではなく生きるための手段です。私が台湾で働いていた時のことですが、地元の公立中学の生徒は英語での会話ができました。厳しい国際情勢の中で、故国を離れて外国で生活せざるを得ない時に備えて、生活の手段として学んでいるのです。

(4)13節には「遠い国に旅立ち」と書かれています。15節に「豚の世話を」させられたのですから、異邦人の国に行ったのです。主なる神のもとから離れた場所に行ってしまったと思いきや、実はそうではなかったことが後で分かってきます。旧約聖書のヨナの物語に似ています。併し、現時点ではそのようなことは全く隠されています。この次男がどの様になっていくのでしょうか、13節の後半を見てみましょう。

「そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった」と書かれています。この次男の生きる目的は何であったのでしょうか。荒れすさんだ生活が続いていたのでしょうか。「財産」と言うことで、私がしばしば申し上げています言葉に「有形資産」と「無形資産」があります。有形・無形と言うのは形の有無でも、目に見えるか見えないかと言うものではありません。そうではなくて、金額で表すことが出来るか否かと言う意味です。無形財産の最も究極的な典型は「判断力」と「決断力」であります。この放蕩息子は判断力も決断力も持ってはいませんでした。欲望と怠慢がこの次男を支配していました。

(5)そして、彼は人生の奈落に突き落とされるのです。14節～16節がそのことを記しています。財産は使い果たし、飢饉が発生し、食べ物が手に入らなくなりました。16節には「(15:16)彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。」と書かれており、17節には「飢え死にしそうだ」とも書かれています。「飢える」と言うことは、私たちのこの日本では、80年前100年前までは身近な状況でした。現代でも、社会の片隅で飢餓に近い状態が存在しています。そもそも、日本国内での食料自給率が4割に満たないのですから、世界の各地で戦争や経済封鎖が発生すれば、日本に住んでいる多くの人々は飢えることになります。安全保障の根幹は食料の確保にありますので、政府はしっかりと政治を行わなければなりません。私自身は飢え(つまり、飢餓)を経験したことはありませんが、幼い頃や学生時代には空腹(お腹がすいている)状態でした。空腹はつらいですが、併し、物事を考える力を与えてくれます。また、働くこととは何か、お金の価値は何かを考える力を与えてくれるのです。空腹とは空腹に負けてしまう力と、空腹から立ち上がる力の両方を持っていますが、その人がどちらかを選ぶかによってその人に人生が180度変わるようになります。

(6)この放蕩息子に転機が訪れるのです。転機とは「我に返」ることです。17節～19節を見てみましょう。「(15:17)そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。/(15:18)ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。/(15:19)もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』」ここに書かれている様に、人間は他人から何回言われても、自分自身で気が付かなければ自分を変えることができません。でも、気が付く仕組みを備えていれば対応することが出来るのです。その仕組みの1つに「ロスカットルール」があります。一定の損失を生じた時に自分を守る、見直すルールです。「ヒヤリとした時、ハッとした時」に自分の存在を確認できるかどうかで

す。この次男は「わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯し」たことを認めたのです。彼は父親の下に帰る決意をして、それを実行しました。主なる神の見えない、併し、確実な愛が注がれていたのです。

(7)彼の父親は、遠くに次男が帰って来るのを「父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」のです。「憐れに思い」とは体の内臓が張り裂けんばかりの思いです。謝りの言葉を話す次男の口(くち)を、父親は閉じさせて、「急いでいちばん良い服」を用意させました。22節に書かれている「指輪をはめてやり」とは権威を表わしており、「足に履物を履かせなさい」とは奴隷ではなく自由人であることを示しています。23節の「肥えた子牛…食べて祝」うとは、最上のもてなしであり喜びです。世間一般から見れば、溺愛にも程がある愚かな親の様に見えますが、そうでしょうか。ルカ福音書第15章の譬え話の「見失った羊」「無くした銀貨」「帰ってきた子供」のいずれも100パーセント諦めざるを得なかったことが、篤い思い、祈りによって完全に、加えて、より愛情深く戻ってきたのです。100パーセントを遥かに超える喜びを伴って帰ってきました。

(8)一方、今日の聖書箇所の後、25節～15章の終わりである32節には、長男の不平不満が書かれています。長男は父親との生活を大切にしてお働き、使用人たちの生活も守り抜いて来た堅実な人物です。長男の思いは、イエス・キリストの御言葉に反発するファリサイ派や律法学者の人々を象徴しているように見えますが、後にアリマタヤのヨセフやパウロが主との出会いから回心して、キリストの弟子となります。マリアの姉であるマルタも御言葉の真実に触れてキリストの弟子となります。

放蕩息子が新たな人生を歩み始めた様に、この長男にも新たな人生が用意されているのです。勿論、私たちは主と共に生きる人生の中にいるのです。降誕前と待降節(アドベント)の期間はそのことに大切に作る時であります。主の御言葉に耳を傾けて、祈りの日々を過ごして参りましょう。

・・・お祈りします。主なるキリストの神様。降誕前の時期を迎え、落ち葉の11月になりました。過ぐる1週間の生活をお守り下さり、新たな1週間の日々をお導き下さることに感謝いたします。これからも人々に平安をお与え下さいますように。戦争が起きている地に住む人々に、自然災害で困難の中にある人々に、生活の中で困っている人々に、平安と慰めがありますように。この教会に連なる一人ひとりにみ恵みがありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

〔新共同訳ルカによる福音書(15:11)また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。(15:12)弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。(15:13)何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。(15:14)何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。(15:15)それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。(15:16)彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。(15:17)そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。(15:18)ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。(15:19)もう息子と呼ばれる資格はありません。〕

雇い人の一人にしてください」と。』/(15:20)そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。/(15:21)息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』/(15:22)しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。/(15:23)それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。/(15:24)この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。〕